

平成 21 年度企画事業

## コミュニケーション育成事業 ～教え学び支え合う人間関係づくり～

- ◆期 日 第 1 回：平成 22 年 1 月 13 日（水）～14 日（木）1 泊 2 日  
第 2 回：平成 22 年 1 月 19 日（火）～20 日（水）1 泊 2 日
- ◆会 場 国立能登青少年交流の家
- ◆対 象 中学校 1 年生とその中学校区の小学校 6 年生
- ◆参加者 第 1 回：H 市内 A 中学校 1 年生 161 名とその中学校区の小学校 6 年生 151 名  
第 2 回：H 市内 B 中学校 1 年生 49 名とその中学校区の小学校 6 年生 49 名
- ◆指導スタッフ 大学生・社会人・青少年教育施設職員
- ◆主 催 国立能登青少年交流の家  
羽咋市教育委員会

### 1 趣旨

- (1)小中交流宿泊体験におけるグループワーク等の体験活動や生活を通して、児童・生徒のコミュニケーション能力を育成し、中一ギャップの解消に貢献する。
- (2)校区ごと募集することで、教育委員会や現場の小中学校教員との連携を深め、青少年教育施設としての新たな役割を探る。
- (3)指導スタッフとして学生等が活躍する場を設け、青少年教育施設の役割を果たす。

### 2 ねらい

- (1)児童・生徒が自分の意見をもってその意見を言う、相手の意見を聞く機会を多く体験させる。
- (2)教育委員会や学校と打ち合わせの場をなるべく多く設け、円滑な運営につなげる。
- (3)指導スタッフに対し養成研修の場を設け、事業の質を高めるとともに、学生にとっても学びの場となるように条件を整える。

### 3 日程

- 《1/13（水）・19（火）》
- 14:00 入所式（小・中学生）
  - 14:30 研修 1「アイスブレイク」
  - 15:30 研修 2「エクササイズ：なぞの宝島」
  - 17:00 イブニングタイム
  - 19:30 研修 3「エクササイズ：人間コピー機」



アイスブレイクの様子

《1/14 (木)・20日 (水)》

7:00 フレッシュタイム

9:00 研修4「メニューはなあに？」

10:50 研修5「中学校紹介」

13:20 退所式



異性・異年齢・異校種交流

[研修内容]



話し合い場面

#### 【アイスブレイク】

小中学生の混合班（1班約24名）をつくり、子ども達の心や体をときほぐすためのエクササイズを行うもの。

#### 【エクササイズ（実習）】

ゲーム形式の課題を小グループで解決する過程で、その時、その場にいる人々とのコミュニケーションやグループワーク等、そこに生じた人間

関係の体験を素材とし、「今・ここ」で起こっていることに焦点を当てて行うもの。全ての実習の後には個々で考える時間の「ふりかえり」と個々で考えたことをグループ内で共有する「わかちあい」の時間がある。さらに本事業では、「自分の意見をもって、自分の意見を言う、相手の意見をきく」というテーマを掲げ、そこに向かって実習の組み合わせ（順序）を工夫した。

##### ①実習：なぞの宝島

情報カードに記載されている内容をグループのメンバーに言葉で伝え、その情報をもとに宝島の地図を完成させ、宝のありかを探り地図を完成させる。

##### ②実習：人間コピー機

室外に貼り出された絵を、各グループのメンバーが交代で一人ずつ見に行く。覚えてきた絵を指定された画用紙にそっくり同じように書き写し、コピーを完成させる。

##### ③実習：メニューはなあに？

指定された食材をすべて使用するという条件で各自がメニューを考案する。次に個々の考えたメニューをもちより、話し合いを通して、グループのメニューを決定する。

## 4 成果と課題

### (1) 事前・事後アンケートによる事業評価

本事業において、事業評価を目的とし、事前事後の変容を見るため、「社会的スキル尺度」と「学校生活スキル尺度」を用いた。「社会的スキル尺度」は円滑な人間関係を営むために必要な行動をどの程度獲得しているか等、人とのかかわりにおける行動を測定することか

ら、「コミュニケーション能力」につながると考え、使用した。「学校生活スキル尺度」については、全ての項目ではなく、「コミュニケーション能力」に関連のある「集団活動スキル」・「同輩とのコミュニケーションスキル」を使用した。

尺度はそれぞれ、「ぜんぜんあてはまらない」を「1」、「よくあてはまる」を「4」とし、4段階で回答するようになっている。調査のタイミングは、事業の一週間前と後である。

得られた結果から、第1回と第2回の両方に共通して変容している点がみられた。それは、社会的スキル尺度において「友だちに親切にする」、「友だちのたのみをきく」の2項目において、第1回目のA中学校の生徒と第2回目のB中学校の生徒両方に見られたものである。それを図1、2に示した。

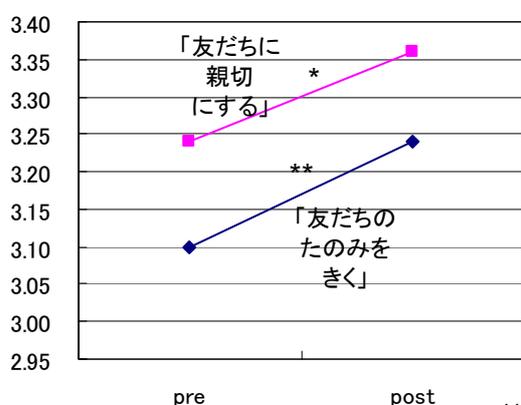


図1 A中学校の結果

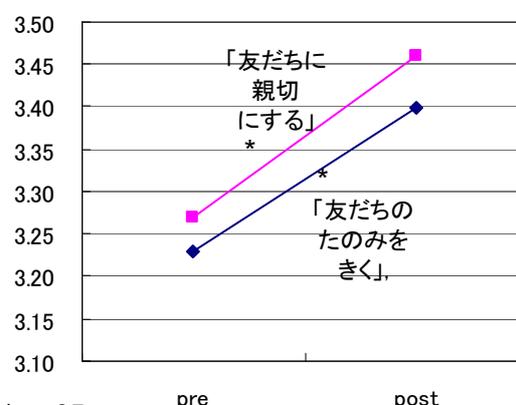


図2 B中学校の結果

\*\*p<.01 \*p<.05

本事業は第1回目と第2回目のプログラムをほぼ統一した。したがって得られた結果から、本事業のプログラムが及ぼす効果として、参加した中学生の「友だちに親切にする」・「友だちのたのみをきく」という意識に変容をもたらしたと言える。

加えて、学校生活スキル尺度の結果から、A中学校の生徒に「異性と自然に話すことができる」という項目において変容が見られた。B中学校についての変容は見られなかったものの、もともとの平均値が高いことがわかる。

ここでは、中学生の結果を中心に提示しているが、本事業は中一ギャップ解消についてもねらいに挙げ、小学6年生も参加者として共に活動している。これまでの結果と先輩である中学1年生という立場を考えると「友だち」とは同級生だけでなく共に活動した小学6年生のことも含まれる可能性も考えられる。そして、A中学校に関しては、「友だち」とは「異性」のことについても示している可能性がある。

以上のことから本事業は、「友だち」へのかかり方に何らかのよい影響を及ぼし、望ましい

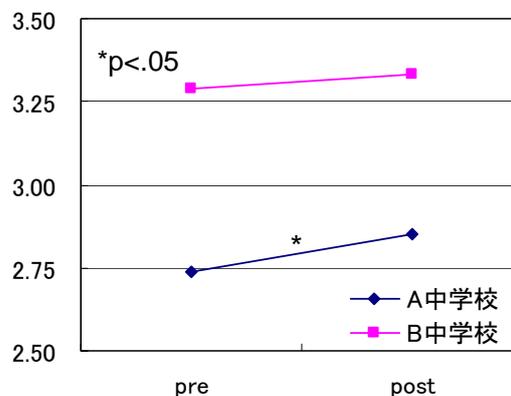


図3 「異性と自然に話すことができる」の変容

変容を見せた。加えて、異性とのかかわりについても「自然と話すことができる」という方向に変容した様子も見られたと言える。

## (2) 成果と課題

### 《プログラムについて》

- プログラムを検討するにあたり、前年度の成果・課題をふまえてテーマを掲げた。そのことにより、事業運営者及び指導スタッフがねらいに向かう意識を明確にすることができた。
- 「ふりかえり」の際に用いるふりかえり用紙の改訂、実習の特徴をふまえた組み合わせ（順番）等、よりよいプログラム運営に向けて整備することができた。
- 本事業は第1回目と第2回目のプログラムをほぼ統一した。したがって、第1回目、第2回目の両方において同様の結果が得られたことは、本事業のプログラムが及ぼす効果として、参加者の「友だちに親切にする」・「友だちのたのみをきく」という意識に変容をもたらしたと言える。
- △指導スタッフや引率教員から事業後に、「もう少し身体活動を伴うものを増やした方がよい」、「最後に達成感を感じて終わられるものを設定して欲しい」等の意見が得られた。それを次年度に反映していく。

### 《指導スタッフについて》

- 指導スタッフとして、募集の際年齢や立場を統一せず、学生だけでなく社会人や当所以外の青少年教育施設職員が含まれたことで多彩な指導スタイルを展開できた。さらに事業後に、その指導スタッフらから様々な観点から意見が得られたので、今後に活かすことができる。
- △本事業の事前研修会として「学んで活かす体験学習法研修会」を実施した。そのことは、本事業のねらい達成に向けて指導者養成の場となっただけでなく、事業趣旨の共通理解の場になった。ただし、「学んで活かす体験学習法研修会」と本事業の関連を明確に示さなかったため、研修会参加者が必ずしも指導スタッフになったわけではない。今後実施するとしたら、関連性を明確にし、参加者を募集する必要がある。
- △指導スタッフは事前研修会に出られない場合もあり、実際には研修期間が短いので、事前の情報提供を工夫する等して補う必要がある。

### 《連携について》

- 前年度同様、教育委員会や担当教諭との事前打ち合わせの機会を持った。本年度はそれに加え、1日目の夜に引率教諭と指導スタッフ、運営スタッフの打合せの機会を持つことができた。それによって、異なる立場が集まって話し合ったことで、引率教諭は子どもたちとのかかわり方をどのようにするか共通理解でき、指導スタッフは安心して翌日の活動にのぞむことができた。